

平成27年度自己評価シート(年度末評価)

校番	068	学校名	広島県立祇園北高等学校	校長氏名	濱岡 正	Ⓐ・定・通	Ⓑ・分
----	-----	-----	-------------	------	------	-------	-----

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当部等
		実績値	目標値	実績値			
1 教職員の授業力・実践力と学校組織力の向上 ①⑤							
生徒にとって「力が付く授業」の実践がなされている。	生徒の授業アンケートの授業満足度に関する項目の肯定的回答率	—	80%	93.6%	A	・学びの変革への組織的体制を確立し、活用コア事業の授業研究を推進することができた。第2回授業満足度の肯定的回答が第1回と比較して、1.2ポイント上昇した。	教務部
教職員が個々の役割を果たし、業務を組織的に遂行し、業務の改善に積極的に取り組み、学校経営への参画意識を高めている。	業務改善に関する教員アンケートの肯定的回答率	88.7%	90%	68.4%	C	第3回業務改善モデル校アンケート集計では「生徒と向き合う時間の確保」は、第1回の結果より7.9ポイント上昇した。「学校経営目標達成への参画意識」は、全日制の平均より8.5ポイント低かった。	校務運営会議

【評価結果の分析】

・今年度、活用コアスクール指定校として、活用コア推進会議を中心とする組織体制を確立し、各教科で学びの変革に向けた取組を計画的に推進してきた。第2回授業評価アンケートの結果では、授業に関する肯定的評価が第1回の92.4%から93.6%と1.2ポイント上昇した。中間評価の課題であった「振り返りの時間の確保」に係る値は、88.2%から89.9%と若干上昇したが90%を下回っており、授業改善の継続的課題となった。ただ、学びの変革による授業改善の成果は徐々に出てきているという実感は得られる。今年度、授業づくりに向けて、組織的体制づくりをはじめ、全体への意識の拡充、公開研究授業の実施、大学入試問題研究及び活用問題の作成に係る研修と分析、考査への活用問題の導入、先進校視察などを中心とする取組を推進してきた。

・第3回業務改善モデル校アンケート集計では、「生徒と向き合う時間」が確保できている割合が、第1回の結果より7.9ポイント上昇した。「学校経営目標達成への参画意識」については、全日制の平均より8.5ポイント低い結果となった。分掌業務や会議などの間接的業務の時間を効率化し、生徒と向き合う時間の確保はできているが、分掌内での個々の業務分担が明確でなく、個人に業務が集中している面がある。業務改善モデル校として、今年度配置された教務事務支援員は業務の効率化にとても役立っている。

【今後の改善方策】

・今後、高大接続改革としての大学入学選抜が大きく変わる中で、より具体的に活用問題を授業及び考査の中に組み入れていく必要があり、教員による発問の工夫や作問能力の向上が急務であると考え。次年度は、大学入試問題研究から活用問題の分析を更に進め、学びの深まりを目指す授業づくりに活用することにより、生徒の思考力・判断力・表現力の育成を図っていきたい。また、活用問題を取り入れた課題発見・解決型授業を各教員が実施し、互見し合うシステムを更に充実させたい。更に、今年度の課題である授業での「振り返り場面」を充実させる取組も進めていく。

・更なる業務改善に向けて、新年度より「教材の共有化、会議の改善、分掌業務の再編と分担の明確化」を通して学校運営への参画意識を向上させる取組をスタートさせる。教務事務支援員の活用をより効率的なものにするため、再度活用の在り方について全体への周知を図る。

2 高い志を持った生徒の進路実現と理数コースの充実 ②④							
自己の生き方、在り方を考え、進路目標を設定し、その第一希望の進路実現に向け努力する生徒を育成する指導がなされている。	高い志を持った生徒の進路実現と理数コースの充実 ②④	69名	100名	83名	B	大学入試センター試験の厳しい結果から、個別指導等を充実させ、きめ細かな指導を行ってきたが、目標値には達しなかった。	進路指導部
	大学入試センター試験結果(900点換算)が全国平均点以上の人数	30名	60名	27名	C	前年度よりも人数が減少し、目標値を大きく下回った。	進路指導部

	1年1月模試における国数英総合偏差値54以上の人数	119名	120名	58名	C	前年度よりも人数が減少し、目標値を大きく下回った。	進路指導部
	2年1月模試における国数英総合偏差値54以上の人数	43名	70名	75名	A	個別指導や学年集会など、通年の指導により前年度より増加し、目標値を超えた。	進路指導部
本校の教育活動を、中学生及び保護者等に対して、定期的・効果的に情報発信している。	オープンキャンパスの参加者数	1,450名	1,500名	1,460名	B	広報活動や内容の改善により、前年度よりも若干増加した。	総務部
	HPの更新回数	120回	130回	120回	B	部活動の成績など、トップページへの情報掲載を行ったが、更新回数は前年度と同じであった。	総務部
高大連携の推進を中心として、理数コースの教育内容が深化している。	生徒アンケートの肯定的回答率	83%	85%	92%	A	日程が限られていた中、例年通りの内容を実施することができた。	理数コース

【評価結果の分析】

- ・大学入試センター試験(900点換算)の点数において全国平均点以上の人数は、昨年度の30名から27名に減少した。国公立大学のAO及び推薦入試での合格者は11名であった。AO・推薦入試を含め、一般入試(前期日程・中期日程・後期日程)までの国公立大学への現役合格数は83名であり、目標とする100名には達しなかった。今年度、受験学部・学科に応じて指導担当を割り当て、個に応じてきめ細かな教科指導や技能指導、面接・小論文指導を充実させてきたが、今年度に入ってからも1、2年次での基礎学力の定着に向けた復習に時間を要し、応用力を十分に伸ばすことができなかった。
- ・模擬試験の国数英総合偏差値について、2学年は、7月51.5→11月49.9→1月50.1と年間通じて維持し、54以上の人数は75人と目標値の70名を上回った。昨年度の1月模試において、教科平均偏差値で5ポイント前後の差があったが、教科バランスの良くない生徒に対して教科面談を行い、1月模試では、国語49.6、数学51.8、英語49.6と全体的に教科のバランスとしては良くなった。
1学年では、7月48.9→11月48.8→1月49.0とほぼ横ばいであった。教科別では国語・数学では若干上昇傾向であるが、英語は11月と比較して1ポイント下降している。総合偏差値が50未満となる生徒が全体の6割を占め、総合偏差値54以上の人数は目標値の半数となった。
- ・第1回オープンキャンパスでは、プログラムを組み替え、進行をはじめ、歓迎演奏や学校紹介DVDなど、生徒が主体となって進めるとともに、来校者全員が視聴できるようにした。また、体験授業も3教科から5教科に増加した。第2回オープンキャンパスでは、生徒による歓迎演奏と受験体験談を導入した。これらの内容の見直しや管理職及び主任による中学校訪問や説明会により、参加者が増加したと考える。HPの更新は部活動や行事を速報形式でトップページに掲載し、更新回数は前年度よりも増加した。
- ・「中高生の科学研究実践活動推進プログラム」の決定時期が9月にずれ込んだため、その後大学との日程調整を行い、実施することとなった。プログラムが採用された他県の学校では、具体的な取組がほとんどできなかったことと比較すると、概ね実施できたことは評価することができる。生徒アンケートの結果、1年生が94%、2年生が90%の肯定的回答をし、平均92%の肯定的な回答が得られた。

【今後の改善方策】

- ・基礎学力の定着に向けて、新入生に対する初期指導を充実させるとともに、今年度取り組んだ計画的な教科担当者面談や進路意識の高揚を図るタイムリーな学年集会等を計画的に実施する体制を整えるとともに、ガイダンスの機能化を図る。また、進路分析会議及び小論文指導研修会を充実させるなど、教員の指導力向上に取り組む。
- ・大学入試問題研究や模試問題等の研究を充実させるとともに、活用問題の研究と工夫を通して課題発見・解決型学習を取り入れた授業内容の一層の充実を図る。また、補習等、学力向上に係る事業を改めて見直し、より効果的な指導となるように再構築を図る。
- ・今後もオープンキャンパスの内容及びHP掲載内容の充実を図るとともに、各種行事や生徒の取組や成果についてダイレクト且つタイムリーに学校の情報を発信する。
- ・次年度は、年度当初から「中高生の科学研究実践活動推進プログラム」をスタートできるため、理数コース生徒の主体的な活動を深化させる取組を充実させていく。

3 生徒の自立と自律の組織的な支援 ③							
家庭学習を習慣化させる取組がなされている。	宅習時間調査での目標達成率 (1年 130分/日) (2年 130分/日) (3年 260分/日)	1年 50%	1年 60%	1年 40%	C	年間通じて全学年とも目標を下回った。 1月達成率は1学年31%、2学年51%であった。3学年は、11月60%であった。	進路指導部
		2年 59%	2年 70%	2年 46%			
		3年 28%	3年 40%	3年 31%			
		(達成率の平均)	(達成率の平均)	(達成率の平均)			

規範意識の高い生徒を育成する指導がなされている。	1日平均の遅刻者数	4.1名	4.0名	4.8名	C	3学年受験期の遅刻者数が増加した。昨年度比で、1日あたり0.7ポイント増加した。(体調不良や通院者を含む)	生徒指導部
生徒の自己存在感を高める取組がなされている。	主体的に行事や委員会、部活動、ボランティア活動に参加したと考える生徒の割合	89%	90%	80%	B	3学年では90%以上の肯定的回答率であるが、1学年の「ひまわり里親プロジェクト」「ルワンダレインボープロジェクト」の認知度が低かった。	生徒指導部
教育相談体制が整い、生徒の支援に役立っている。	生徒・保護者アンケートの肯定的回答率	92%	90%	93%	A	肯定的回答率は目標値を超えた。カウンセラーによる継続的な教育相談活動や校内委員会等での連携により、支援体制の充実を図ることができた。	保健部
校内環境美化活動が積極的に行われている。	生徒・保護者アンケートの肯定的回答率	85%	90%	92%	A	肯定的回答率は目標値を超えた。小中高合同環境美化活動や美化強化月間、大掃除を通して環境美化に対する意識を高めることができた。	保健部

【評価結果の分析】

- ・宅習時間調査(4・6・9・11・1月)の目標達成率の推移は1学年(50%→37%→37%→44%→31%)、2学年(44%→42%→44%→51%→51%)、3学年(0%→7%→55%→60%)であった。1学年は1月集計結果において自宅学習時間が12.3時間と11月と比べて1.8時間減少したため、早急に進路指導部と学年会が連携し、学年全体で原因を探り、学習を充実させる取組を開始した。2学年は1月集計結果において15.4時間と11月時の集計から0.2時間増加した。3年に向けての学習の姿勢や進路実現に向けて学年集会を行うことで受験生としての意識喚起の取組を充実させた。目標値に届かなかったが、両学年とも自宅学習を充実させる取組を進めており、次年度の学年のスタートへとつなげていきたい。3学年は夏季休暇以降、多数の生徒が学習時間を増やしたが、取組の開始が遅く、年間を通じては目標を達成できなかった。
- ・数年前の1日8名程度の遅刻数に比べると、その後の取組の充実により、徐々に減少してきたが、今年度の遅刻者数は、昨年度の1日4.1名から本年度の1日4.8名(通院者含む)へと増加した。引き続き、社会に通用し活躍できる人材育成をめざし、指導を継続する必要がある。
- ・本年度も、ひまわり里親プロジェクトによる小中高連携を継続した。一方、ルワンダレインボープロジェクトも継続し、ライオンズクラブから表彰され、これについて本年度は教育長表敬訪問が実現した。しかし、この活動の知名度が予想以上に低く、アンケート結果では、目標の90%に届かず80%であった。「文武両道」のもと、三大祭は成功し、多くの大会実績があるなど各部活動は充実している。
- ・環境美化や教育相談について、年2回生徒及び保護者にアンケートを実施した。第2回アンケートでは、環境美化活動については92%、教育相談体制については93%の肯定的回答を得た。昨年度比では、環境美化活動については7ポイント、教育相談体制については1ポイント肯定的回答が上昇した。いずれの項目も生徒に肯定的な見方が多い結果であった。生徒アンケートでは、意見欄を設けた。その中で昨年度に続き、トイレの臭いと汚れが指摘された。誰もが使用する場所であるだけに、更に掃除の徹底を図る必要がある。また、保護者アンケートで「体罰・セクハラ相談窓口」の設置について、「知らない・よくわからない」という回答が21%あり、保護者への周知が次年度に向けての継続課題である。

【今後の改善方策】

- ・各教科において、生徒の主体的な学びが促進されるように組織的な授業づくり(学びの深まり)に取り組むとともに、それが生徒の予習・復習の充実につながるものとする。家庭学習の内容及び成果が日々の授業にリンクし、十分に生かされるような学習指導、授業づくりの改善に努める。3年間を見通し、より組織的・計画的なキャリア教育・進路指導を推進していく。
- ・宅習記録の記入方法や重要性が分かっていない生徒も少なからず存在し、目標を達成できない生徒に対する個別面談を充実させる。
- ・今後も規範意識やマナーの向上において、生徒の自主自立性を更に育てる必要がある。また、自転車通学のマナー向上について、新年度、自転車交通安全に係る研修を、広島県教育委員会の実施した形式に準じて自動車学校(日本初の事例とのこと)で実施する。
- ・1学年へのひまわり里親プロジェクトとルワンダレインボープロジェクト宣伝が不足しているため、アピールしていくとともに、学校への帰属意識や自尊心の醸成に繋げる取組を進めたい。本年度は学校HPでの周知に比重があったので、次年度はSHRでの生情報として周知を図る。
- ・生徒から恒常的に指摘されるトイレの美化については、学校施設の構造的な問題もあり、日々の清掃の徹底に加え、定期的・計画的な業者による清掃等の導入を検討することとし、年度末に業者による清掃が行われた。
- ・保護者の本校に対する満足度を高めるために、本校の環境美化活動や教育相談活動についてあらゆる機会を利用して発信する。